

## 序章 ソヴィエト・マルクス主義哲学史の再解釈に向けて

金山浩司

二十世紀、七十四年間にわたって継続したソヴィエト連邦（以下「ソ連」と略称）を対象とした歴史研究は、崩壊の衝撃から三十年以上にわたって、深化してきている。まず、崩壊前後より文書館史料の広範な利用が可能になったことにより、以前は不明だった、ないしゴシップとしてしか知られていなかった諸事実が開示されていった。続いて（ないし並行して）、かの国である程度教育を受けた若手研究者たちが諸外国の歴史学の成果を積極的に受け入れ、ないし交流を深めたことなどもあり、新たな解釈、歴史像の提示が行われてきた。筆者らの専門分野である科学技術史の領域でも、公にされてこなかった諸事実が詳しく掘り起こされてきたばかりではなく、ソ連崩壊直後は勢いを得たようにも見えた、ソ連を全体主義としてみなす議論に対して、再び見直しを迫るような研究成果が次々に生まれてきている。<sup>1)</sup>

一方、思想史・哲学史についていうと、ソ連史のほかの領域に比べ、こうした活性化の段階に至ってい

るのかどうか、疑問なしとはしない。ソ連に生きた思想家・思想的潮流についての研究が全般的に沈滞しているわけではない。非・マルクス主義的ないし非・体制順応的であったがソ連で暮らしていた大家たち（フロレンスキイ、シペート、バフチン、ロートマン、ママルダシヴィリ、ヴェルナツキイなど）についての研究や、文化史の中に反映される思想的運動の考察については、わが国のそれも含めて近年ますます興隆がみられる。<sup>3</sup>しかしその一方、ソ連時代に公の言論空間で量的には大量に流布していた、マルクス主義に基づく哲学的論考は、今日、めつたに顧みられることがない。その思想内容を扱う研究はもとより、こうした知的・政治的活動に携わった人物たちの評伝的研究にしてもその数は少なく、ロシア本国でも、本書がこのたび複数の論考を収録しているコルサコフの孤軍奮闘が目立つ程度である。

こうなるに至った理由は推測がつく。ソ連公定イデオロギーと化したマルクス主義的思想（マルクス・レーニン主義とも呼ばれた）の内容確定と言論空間でそれが役割を果たすに至る経緯は、一九三〇年前後からのスターリン体制確立と密接に結びついていた。<sup>3</sup>この「主義」は一九五〇年代のスターリン批判とその後「雪解け」の時期までは特に、少なくとも公に出る形としては、いかにも画一的・教条的であり、発展性のないものに見え、しばしば、特定学問分野の内実をめぐる政治的論難のさいの道具として援用されてきた。<sup>4</sup>スターリン時代以降のソ連に生きて教育を受けた人々にとって、公定イデオロギーはその内容を十分に咀嚼すべき対象というよりは、公的空間での無難なふるまいにまとわせるための衣装、形式的ないし祝祭的な言辞としてとらえられ、しばしば、その内容自体を空洞化したうえで<sup>5</sup>の発話がみられた。こうしたこと一切は、一般的にいって、公定イデオロギーそれ自体の検討や影響に対しての拒絶的ないし冷笑的な態度を涵養したであろう。

ペレストロイカ期における、スターリンらにより弾圧されたブハーリンなど初期ソ連のマルクス主義思

思想家たちの復権と読み直しも、長くは続かなかつた。ソ連崩壊以降は、ソ連公定イデオロギーとはかかわりの薄い先述したような思想家たちや、ソ連国外で活躍した思想家たちへの着目が大いになされる一方、本書のゴルサコフ論文(第二章)が記すように、マルクス主義哲学の樹立に尽力した(その努力の多くは、スターリンの弾圧により、悲劇的な形で中断・窒息させられた)真剣な学者たちの生涯は顧みられず、彼らの思想的な位置づけも十分に行われないうままである。

本書は、こうした現状を打破すべく、日本そしてロシアの哲学史・科学史の研究者らの力を結集する形で、スターリン時代(一九二〇年代末から一九五三年のスターリンの死にまで至る)のマルクス主義哲学——それも、主として自然科学にかかわる——の再考を試みている。そのさいには、一九二〇年代にみられた創造的マルクス主義解釈の試みが三〇年前後の「上からの革命」の過程とその後数年間でのスターリン独裁体制の成立により圧殺を被ったということだけではなく(このこと自体は従来から着目されてきた)、公定イデオロギーと化したこの哲学が、諸科学とりわけ自然科学をいかに方向づけ、そこに携わる人々の思考・意識を規定していったのか、あるいは科学者や哲学者はこの思考装置をいかに具体的に適用していったのかという側面にも光を当てた。以下、自然科学とも相互に関係してきたマルクス主義哲学Ⅱ弁証法的唯物論の持っていた含意と、それがソ連史(とりわけ、スターリン時代までのそれ)にとつて持つていた重要性を見ていくことにしよう。

ソ連を建国した主役であったポリシエヴィキは、ロシア社会民主労働党のうちレーニンが率いた一派であり、のちに全連邦共産党(ポリシエヴィキ)と称した党派であるが、これを支えていたイデオロギーは、言うまでもなくマルクス主義であり、その思想的性格は建国の理念、各種政策、指導者層・国民双方のメ

ンタリテイをはじめとする文化に——もちろん常にでもなく完全にでもないが——大きく影響するものであった。社会政治的理念として、それは現状の世界の大半を支配するとみなされる経済政治体制（「ブルジョアの」体制）への挑戦を志向するものであり、歴史法則主義的観点に基づく使命感、すなわち、共産主義社会の樹立に向けた使命感を内包したものであった。また、それは同時に普遍主義的・国際主義的であり、このことは、ソ連の正式な名称である「ソヴィエト社会主義共和国連邦」に民族や地域の名が一切含まれていないことに象徴的に示されている。この普遍主義は——時期によつてこれを前面に出すかどうかは濃淡あるにせよ——ソ連のようにただでさえ多種多様な民族を内に抱える広大な空間を包摂統治するための、また、ソ連と同様の体制の国境を越えた拡張を正当化するための理論的装置として、動員されることになる。

認識論的・存在論的次元においては、マルクス主義は、蒙昧さあるいは「反動的なる」ものに対抗し、あらゆる宗教的・因習的観点をその社会経済的根源にわたつて問い直すことで脱神秘化するという意味で合理主義的であり、自然科学を含めた西欧の学問的文化的成果をすべて会得したうえでさらにそれを展開させていく、最新鋭の進歩的なるものとされた。弁証法的唯物論は——これはスターリン期に確立・再解釈されたそれを言うのであり、マルクス・エンゲルスの思考そのものと同一視してはならないが——唯物論を標榜しており、精神の第一次性をいう観念論よりもより科学的であり、また進歩的な社会思想と結びついているとみなされた。さらにその唯物論の中でも、十九世紀半ばまでの通例であった、諸科学の力学への還元を志向する機械論的なそれではなく、弁証法的なそれこそがさらに進歩的である、との了解のもと、こうした唯物論がマルクス・レーニン主義の世界観であると措定された。ちなみに後者の「弁証法的な」自然解釈が何を表すのかについては、革命以前には未整理な状態のままであり、本格的には一九二〇

年代の論争を経て確立したものである。

弁証法的唯物論の内実を完全な形で定義するのは難しいだけでなく、そう試みることは単純化の危険を冒す。この立場は、あらゆるイデオロギー的論争において護符として乱用されたがために、時に内実は空疎化され、論者によって解釈は様々であった。それにしても、ある程度の見取り図は必要であろうかと思われるので、ソ連科学史の泰斗である米国の歴史家、ローレン・グレアムがかつてまとめた便利な叙述も参照し、最大公約数的な見解を記してみよう。

それはまずは世界が物質的であり、現代の科学が物質・エネルギーと呼ぶものによって成り立っていることを主張する。また、物質的世界は相互に関連したまとまりをなしており、そこから孤絶した物質というものも存在しえない。さらに、人間の知識は、客観的に存在している实在物（自然界のものであれ、社会的なものであれ）から引き出されるのであって、意識が存在を規定するわけではないことが強調される。また、世界は常に変化しており、実際、この世界に真の意味で静的なものというのではない。かつ、ここにおいて現出する運動は、内的な要因によって説明されるために、（アリストテレス自然哲学などで援用される）外的な動者は必要ないとされた。また、物質の変化というのはある全体的な規則ないし法則に従って起こるのだが、その一方で、物質の発展法則は別の段階ごとに別のものになる。であるがゆえに、生物学的な有機体のような複雑なものをもっとも基礎的な物理法則によって説明するということは、いかなる場合においても期待できない（範疇的多元論）。また、この世界の知識についていえば、物質はその性質において汲みつくせないがため、人間の知識が完全なものになることはない。その一方で、弁証法的唯物論は不可知論や相対主義的なあきらめには決然として反抗する。すなわち、それは人間の知識が時とともに、実践活動にも伴って、増大していくことを強調する。しかもこの増大はその都度の相対的眞

理の把握の蓄積を通じて起るがために、必ず直線的に起るとは限らない。総じて、弁証法的唯物論はわれわれの常識にむしろ近づいた立場であり、それ自体を取ってみれば自然科学者を含めた多数の人間に受け入れられやすいものをもっていると言つてよいだろう。

さて、弁証法的唯物論の具体的な中身がいかなるものであれ、こうした、社会経済思想に限定されない自然観も含めた包括的な世界観こそが、ソ連では革命の遂行を支えるためのイデオロギーとして機能していた。こうした事情は、他国・他地域にまったく例がないわけではないにせよ、ソ連の大きな特徴であつただろう。ソ連を代表する哲学・イデオロギー研究機関であつたマルクス・レーニン主義研究所の歴史を克明に記したモソロフはその本の冒頭で、「ソ連においては党のイデオロギー的事業は、計画的生産、国家安全保障の諸組織を全面的に統制すること、そして一党制のシステムのとき、社会体制のまさに本質的要素であつた」と述べている。<sup>(10)</sup> また、グレーアムが言うように、ロシア革命は、「それまであつた『ブルジョア式の』描出に意図的に対抗するような、マルクス主義的な自然解釈を呼びかけた」のであり、「歴史上、ラディカルでかつ認識論的な体系性をこれほどまで内包していた革命は他になか」つただろう。<sup>(11)</sup>

このように、単に「富国強兵」だけを目的としていたわけではなかつたソ連国家は、そのリソースの多くを、理論・イデオロギー部門のための制度的整備に充てている。哲学分野も含めた指導的な人材養成のための教育研究機関としては共産主義科学アカデミー（一九一八年の設立当初は社会主義科学アカデミー、一九二四年に改称、一九三六年まで存続）や赤色教授学院（一九二一年に設立、一九三八年まで存続）があり、また、党発行の雑誌（原則としては月刊）『マルクス主義の旗のもとに』（一九二二—四四年）では、その紙面が、自然科学も含めた諸学問の理論に対するマルクス主義的見地からの批判や各種論争にあてられていた。

こうした制度的後押しもあり、一九二〇年代のソ連の論壇は、本書の主人公のうちの幾人かが活躍する場ともなり、唯物論哲学の同時代的形態の確立を目指して著述と論争が行われる、ちょうど同時期の芸術分野と同様の活況を呈することとなった。自然科学分野について言うと、エンゲルスの『反デュリング論』（一八七八年）と、レーニンによる、二十世紀初頭の論争のために書かれた『唯物論と経験批判論』（一九〇九年刊行）がその一部を自然科学分野についての考察にあてていたことは知られていたが、一九二〇年代には文献学者リャザーノフの尽力により、世界で初めてエンゲルスの自然科学関連の遺稿が『自然弁証法』として編纂され公刊された。これにより自然科学関連で参照されるべきマルクス主義古典はそろったと言ってもよいが、当然のことながら各分野の状況は日進月歩であり、唯物論哲学の要諦をこうした進展をもにらみつつどこに求めるべきかは、当時の政治的対立とも相まって、激しい議論を巻き起こした。「機械論者」と「弁証法論者」との対立がそれであり、この論争が後者の一応の勝利でひと段落したのち間もなく、「上からの革命」期にあたる一九三〇年後半からは、スターリンのテコ入れを受けた第三極が、弁証法論者をも政治的難詰により追い落としていった。この過程は本書所収の藤岡論文に詳しい（第一章）。

さて、一九三〇年代以降、スターリン派の哲学者ら（本書第三章が扱うミーチンや、第四章が扱うコーリマンら）は政治化の嵐と反対派の追い落としの中で、これらの論争の参加者、これら定式の提唱者を政治的に難詰するとともに、同時に論敵の成果を奪取し、ソ連公定イデオロギーの核に組み入れていくことになる。一九三八年にスターリン自らの介入を経て完成した、公定イデオロギーの一般国民向け教科書ともいうべき『全連邦共産党（ボリシエヴィキ）小史』（以下『小史』と記述）の一章（第四部第二章）は、「弁証法的唯物論と史的唯物論について」と題され、その一部は弁証法の概説にあてられている。同

書の大部分を占めているのは無論、歴史的記述であるが、哲学的世界観にも一言あってしかるべきと判断されたわけである。ここでは、弁証法的唯物論は史的唯物論の基礎を形づくるとされていた。

ただし、スターリンの容喙があつたうえでこのような定式化がなされたとはいへ、独裁者が弁証法的唯物論の明快な定義づけを行つて諸学問への応用の道の手をつけてくれたわけではない。もともと、スターリンが一九三〇年前後にデボーリン派への反対派に肩入れしたことも、明確な思想的動機にもついたものだったとは思えない<sup>(13)</sup>。実際、『小史』刊行当時から、「弁証法的唯物論と史的唯物論」における記述があまりに単純化され、表面的に過ぎるものにとどまっていることには批判があつたという<sup>(14)</sup>。哲学分野においてスターリンの踏み込みが浅かつたことは、自然科学とイデオロギーとの結節点についての議論に対しての明快な指針を不在のままとさせた。このことは、その後の論議を混乱させるとともに、ある程度の振幅（柔軟性とまでは言わずとも）を用意する源泉となつたかもしれない。

さて、以下、本書各章の内容を瞥見していくこととしよう。

最初を飾る藤岡毅「ソヴェエトにおける「マルクス主義」公式化の始まり——一九二〇年—一九三〇年代始めの哲学・科学論争」（第一章）は、一九二〇年代のマルクス主義哲学と自然科学との関係全般についての議論から語り起こし、二〇年代末から三〇年代初頭までの「上からの革命」を経る中で、同様の議論をとりまく知的・政治的環境が（とりわけ生物学において）いかにスターリン体制確立にともなう変容を被つたのかを、詳細に解き明かしている。二〇年代の弁証法論者（デボーリン派）と機械論者との論争について、そして、二〇年代末に前者がソ連言論空間におけるヘゲモニーを握つたもののごく短期間のうちにスターリンの後ろ盾をもつ若い哲学者たち（ミーチンら）により圧殺されていった過程が語られる。